

AMDA ジャーナル ダイジェスト

発行：2012年12月 No.39 定価 150円
 発行元：〒700-0013 岡山市北区伊福町3-31-1
 特定非営利活動法人 アムダ：AMDA
 TEL 086-252-7700 FAX 086-252-7717
 E-mail:member@amda.or.jp
 編集：AMDA ボランティアセンター
 ホームページ：http://www.amda.or.jp

AMDA 東日本大震災復興支援事業 第2回スポーツ親善交流事業を開催

11月3日(土)に気仙沼市津谷中学校のグラウンドを会場に「第2回東日本大震災復興支援・スポーツ親善交流プログラム」を実施しました。

参加したのは大槌中学校(岩手県)24人、気仙沼中学校(宮城県)13人、志津川中学校(宮城県)15人、津谷中学校(宮城県)14人の4校のサッカー部員と、その監督、コーチを含む73人。さらに、救護所設営のために、大槌病院から3人、猪苗代病院(気仙沼)から5人、志津川病院(南三陸)から3人の医療従事者が参加し、大会の運営スタッフなどを含め、総勢108人が参加し、開催されました。

本事業は2011年8月に岡山市、総社市を会場に開催されたスポーツ交流事業の第2回で、「被災地間交流」「同世代間交流」のコンセプトのもと、今回は被災地県内で開催されました。

当日は晴天に恵まれたものの、吹き付ける風は非常に冷たく、冬の気配を感じさせる1日でしたが、参加した皆が思いきり笑顔で過ごした1日となりました。

午前中は学校対抗の試合を総当たり戦で、各校3試合ずつ行いました。午後からは、全体をAチーム、Bチームの2つに分けてマラソンリレー式の混合試合を行いました。混合試合



には、各校の顧問の先生方、猪苗代病院の看護師の方々、そしてAMDA大槌健康サポートセンターのスタッフも参加して、盛り上がりを見せました。普段、先生と生徒と一緒に試合に出る機会があまりないため、先生方が熱くなって試合に参加している姿を見て、子どもたちも楽しんでいました。

また会場には救護所を設置し、AMDAが支援を行っている猪苗代病院、大槌病院、志津川病院の医師および看護師の方々にご協力をいただきました。それぞれに学生の試合を観戦しながら、医療機関、医療スタッフ同士が交流を持つこともできました。

昼食には、公益社団法人日本国際民間協力会NICCO、AmeriCaresによる温かい炊き出しがあり、カレーのいい匂いが会場に立ち込め、全員にふるまわれました。

スポーツ交流事業に参加した学生の声

- ・他県のチームと戦えて、同じチームで仲良くなれた
- ・とても楽しめたとし、良い経験ができたので良かったです
- ・今回の交流を通じて、みなさんに元気づけられた
- ・学校を超えて、みんなで協力してゴールに向かって行けた
- ・こういう交流はぜひこれからも続けてほしい
- ・他の県でもサッカーをやっていたら友達としてつながれるんだ

学生を引率した教員の声

- ・震災から1年半以上経ったこの時期に、このような会を開催してくれたことに本当に感謝している
- ・こうやって被災地のことを思っている人たちがいることは、子どもたちに伝わったはずだ

参加したスタッフたちの声

- ・今回のサッカー交流を通して改めてサッカーというスポーツの素晴らしさ、重要性を感じました

AMDA 東日本大震災復興支援事業

鍼灸治療活動 (岩手県大槌町、宮城県雄勝町)

高齢化が進む被災地では、鍼灸治療のニーズが高く、AMDAでは、岩手県大槌町、宮城県石巻市雄勝町で地元鍼灸師による鍼灸治療活動を継続しています。いずれも地元医療機関の協力の元、健康保険の導入を行っています。

鍼灸室のあるAMDA大槌健康サポートセンターでは、高齢者だけでなく、地元の高校生なども施術を受けに訪れます。

また大槌町でも、雄勝町でも患者の方々の鍼灸治療に対する再受診率が非常に高く、心身共に鍼灸治療の効果を実感していることがうかがえます。

月別鍼灸治療のべ患者数 (2012/5 から 2012/11 月末まで)

	大槌町		石巻市雄勝町		雄勝町では週に1日のみ鍼灸治療日を設定、雄勝町の3地区(名振、水浜、大須)を巡回し、完全予約制で治療活動を行っています。
	患者数	回数	患者数	回数	
5月	184人	10	44人	4	
6月	169人	10	33人	3	
7月	150人	10	35人	3	
8月	155人	10	休診	0	
9月	103人	10	22人	2	
10月	131人	10	31人	3	
11月	124人	10	21人	2	

◆活動の軌跡 (2012年5月～11月)

- 7.9 第3回AMDA被災地間交流事業 つなごう阪神淡路～岩手県大槌町～宮城県気仙沼市
- 7.15 ～9/28 夏季医療ボランティア派遣(公立志津川病院南三陸診療所) 医師2名、看護師5名
- 7.25 ～7.29 夏休み高校生招へいプログラム(岡山)
- 8.22 ～8/26 おかやま経済同友会主催の大学生ボランティアツアーの受け入れ(大槌町)
- 9.1 石巻市雄勝町における巡回鍼灸治療に対する健康保険の導入
- 9.19 阪南大学ボランティア学生受け入れ(雄勝町)
- 10.5 ～10.10 おかやま国際塾1期生ボランティア受け入れ
- 11.3 第2回AMDAスポーツ交流プログラム(気仙沼)
- 11.23 ～11.25 AMDA玉野クラブ視察受け入れ

東日本大震災復興支援事業

高校生防災交流プログラム (岡山西南ロータリークラブ・AMDA)

南海トラフ地震に対する防災教育が注目される中、岡山県立興陽高等学校・インターアクトクラブの高校生2名が、岩手県上閉伊郡大槌町を訪れ、ボランティア活動や大槌町在住のAMDA高校生会らとともに情報交換の時間を持つことができました。これは岡山西南ロータリークラブの支援により実現したもので、AMDAではフィールドでの活動のコーディネートを行いました。

2名の学生の引率として本プログラムに参加した教諭からは「被災地で見たこと、聞いたこと、そのすべてがとても印象深かったようです。この二日の間に、二人の生徒の顔つきも態度も随分と変わり、被災地の復興のことやがれきの処理のことを質問してくるなど関心も深まったようです。」と感想が寄せられました。

「来年もぜひまた大槌に行きたい。」と話す学生さんのエッセイを一部紹介します。



被災した大槌中学校で清掃活動する様子

■家政科1年 高島晴佳さん

私は、8月22日から25日に岩手県大槌町に行きました。今回の体験で一番印象に残っていることは、大槌中学校の掃除です。中学校は地震が起きた日とほぼ同じ状態だったのでおどろきました。ですが、床を掃いたり、物を動かしていくうちにきれいになっていく中学校を見てうれしい気持ちになりました。

また、中学生と一緒にやった焼肉カーニバルも印象に残っています。中学生は今、仮設校舎で勉強していて大変だと思うのに、元気な声で挨拶してくれたり、笑顔で過ごしている姿を見て、私まで笑顔になりました。

今回の体験を通して、これからも東日本大震災があったことを忘れないで、これからもできることがあればやっていきたいと思いました。また、岡山県でも震災が起きたら、私にできることがあれば、進んでやっていきたいと思いました。

■農業科1年 三宅加奈子さん

私が岩手県に行ってみて、最初に思ったことは「思ったより被害は少なかったのかな？」ということです。しかし、一歩大槌町へ入ってみると、がれきの山や、プレハブの住宅など、復興が進んでいないところがたくさんありとても驚きました。

中学校の清掃ボランティアをしました。職員室の掃除をしたときには、3月11日と書かれたホワイトボードや黒板があって、とても切なくなりました。でも思い出の詰まった校舎を清掃するうちに、中学生たちの大好きだった校舎を、きれいにして送り出してあげたいという気持ちになりました。

たった4日というとても短い期間でしたが、私たちは震災と向き合い、被災された方たちのことを思って、二度とこんな経験のないようにしたいという思いでした。

地震とは、津波とは、とても怖く恐ろしいものだとは再認識し、南海トラフ沖地震に備えた知識、準備物などを教えてもらった4日間でした。これからも被災された方々の復興を願い、私たちの身の回りの安全の確保は本当にできているのかを考えながら生活していきたいと思いました。

AMDA 東日本国際奨学金

2012/11/20 時点

本奨学金の趣旨に御賛同くださった多くの方のご支援のお陰で、2012年度も新たに奨学生の募集を行うことができました。昨年度奨学生となって、受給をスタートした学生の内、卒業生を除く62名には、本年度の奨学金の振り込みを終えました。また新たに、宮城県立気仙沼高等学校にも奨学生の枠を設け、15名(1年生5名、2年生5名、3年生5名)、宮城県志津川高等学校には追加の新規枠として、2011年度奨学生となった学生とは別に、追加で15名(1年4名、2年2名、3年9名)が支給対象となりました。現在、岩手県立大槌高等学校へも2012年度の奨学生追加枠の告知を行っており、学校の方で奨学生の追加選定が完了し次第、ご連絡いただくことになっています。新たに奨学生となった学生から届いたエッセイを一部紹介します。

◆志津川高校3年生

私は昨年に起こった東日本大震災の影響により、避難生活を体験したことで、医療に関する仕事に興味を持ちました

避難所生活を続ける中で、私や家族はもちろん、すべての人たちが、これからの生活について不安を抱き、心が落ち着かない日々を過ごしていました。そのような中で、全国から医師をはじめとする医療関係者の方々が、診察したり、励ましている姿を見て、人を助けることができる仕事がとても素晴らしい仕事であると改めて感じました。そこで、将来は直接人を助けることができる仕事をしようと思いました。

ニュースに映し出される映像から、多くのお年寄りが環境の変化により、自立した生活から介護を必要とする生活に変わってしまっていることを知りました。そこで卒業後はまず医療に関する知識を身につけた介護士を目指したいと思っています。

多くのお年寄りにとって、よりよい生活を送ることができるように手助けをしていきたいと思っています。

◆志津川高校3年生

私の将来の夢は看護師です。

なぜなら、人のために役に立ち、人に頼られる、たくさんの人とかかわることができる仕事は看護師だと思うからです。

看護師になりたいと本気で思ったのは、東日本大震災があったからです。それまでは、興味はありましたが、将来自分になりたい職業ではありませんでした。しかし、東日本大震災を体験し、多くの人が亡くなり、多くの人が怪我をし、私がいた避難所の仮設病院は常に人がいっぱいいました。また、震災で体調を崩す人もいました。私も避難所で胃腸炎になりました。すごく体調が悪く看護師さんにお世話になりました。今もその時にお世話になった看護師さんのことが忘れられません。すごく感謝しています。私も看護師になったら、この人のお世話になってよかったと思われるような看護師になりたいと思いました。

看護師になることは簡単なことではないけれど、沢山のひととかかわれる看護師になりたいと思いました。

将来目指す職業の内訳

医師	9名
薬剤師	6名
看護師	30名
助産師	1名
保健師	1名
臨床検査技師	2名
放射線技師	2名
理学療法士	14名
介護士	3名
養護教諭	1名
その他	23名
奨学生	全92名

海外緊急支援活動 & AMDA 海外支部からの活動報告

バングラデシュ洪水緊急医療支援活動



6月下旬から降り続いてた豪雨のため、バングラデシュ北部の広い範囲で洪水被害が発生。家屋の浸水や道路の冠水の被害の他、孤立した集落なども出てきており、被害は広がっていました。この状況を受けて、AMDA バングラデシュ支部、日本バングラデシュ友好病院、日本から調整員1名を派遣し、医療チーム（医師2人、保健師1人、調整員2人）を結成し、12日早朝、バングラデシュ北部ラングプール管区（Rangpur）クリグラム県（Kurigram）の被災地に入りました。医療チームは巡回診療を実施し、のべ1,155人の診療を行いました。主な症状は風邪、頭痛、身体の痛み、下痢、発熱、皮膚の痒みなど。また、地元NGO・AFADの協力もあり、食料（非常食用の米、糖蜜等）、浄水タブレット、ORS（経口補水液）のほかサリーやルンギなどの衣料品などのべ3,000人に支給を行いました。AMDAチームが訪れた時には、北部には支援物資が行き渡っておらず、巡回診療や物資支給の際にはいづれも長蛇の列ができ、チームは大変喜んで迎え入れられました。



■日本からの派遣者
竹谷 和子：調整員、AMDA ボランティアセンター参与、AMDA 玉野クラブ クラブ長、玉野市在住

グアテマラ地震緊急支援活動



11月7日にグアテマラ西部チャンペリコ（Champerico）の南24キロで、マグニチュード7.4の地震が発生した。AMDAでは、グループ内のAMDA社会開発機構のプロジェクトサイトが隣国ホンジュラスにあることから、AMDA社会開発機構の現地スタッフから成る支援チームをホンジュラスから派遣しました。



11日にグアテマラ入りしたチームは、グアテマラシティで物資の購入などを行い、13日にはトトニカパン県ツァニスナン村でテント14個や寝袋50個を、直接被災者に提供しました。テントと寝袋を受け取った一家からは「地震で家屋が倒壊して、夜には0度近くなるため、寒さをしのぐことができない。テントの支給は本当にありがたい。」との声がありました。またAMDAのチームに同行した、トトニカパン県庁の災害担当者は、「政府の支援は国家災害対策調整委員会を通じて行われるため、地方としては中央政府の判断、命令を待つ時間が長く、今回のように支援団体が直接現地に物資を運搬し、政府の許可を待つことなく住民に支援を届けることができたことに非常に感謝している」と状況を語ってくれました。

■ホンジュラスからの派遣者
陰山 亮子：調整員、AMDA 社会開発機構 ホンジュラス事業 コーディネーター
エメルソン・ロドリゲス（Emerson Anibal Rodriguez Cruz）：調整員、AMDA 社会開発機構ホンジュラス事業 現地スタッフ

AMDA インドネシア支部 口唇口蓋裂無料手術プロジェクト



AMDA インドネシア支部はインドネシア・スラウェシ島のイブンシーナ・マッカサル病院（Ibnu Sina Makassar）、サヤン・ラカヤ病院（Sayang Rakyat）と協力し、口唇口蓋裂の患者に対し無料手術を行いました。今回が初回であるこのプロジェクトは、10月20日、21日の2日間に渡ってAMDA インドネシア支部の医師を含む、医師、看護師、手術助手の協力の下行われました。

口唇口蓋裂（こうしんこうがいれつ）は、頭蓋顎顔面領域において最も多い先天異常で、口唇または口蓋に裂のみられる、外見に目立ち、発音や食事に困難をきたす先天性疾患で、日本では乳児のうちに手術が行われます。発生頻度は人種によって著しく異なり、日本人を含む黄色人種における発生率は最も高く、おおよそ出生児500～600人に1人といわれています。患者は、就職や結婚において決定的に不利な状況に置かれており、手術を受けたのは20歳以下の口唇裂患者16名と口蓋裂患者17名の合計33名。手術後はそれぞれ入院し、

必要な術後治療も行われました。手術を受けた若者たちからは、未来への夢・希望を実現させるきっかけとなる無料手術を提供した医療スタッフらに感謝の言葉が述べられました。

AMDA インドネシアは、2012年11月にも南スラウェシ州パロボ市にて第2回口唇口蓋裂無料手術プロジェクトを行う予定です。

医療和平事業 (Peace Building Project in Sri Lanka)

パートII

スリランカ医療和平事業

中学生を対象としたスポーツ、民族、宗教、文化の交流

2012年10月5日から7日の日程で、AMDAは世界宗教者平和会議(WCRP)スリランカ委員会と共同でAMDAスリランカ支部と協力し、医療和平事業パートIIとして、スポーツ、宗教、文化の交流プログラムをそれぞれスリランカ北内陸部に位置する歴史的都市アマラダプーラにて実施しました。

医療和平事業とは、相反する両グループに同じように医療を提供することで、和平構築に資することを目的とした事業。スリランカの内戦停戦中の2003年から3年間、異なる3つの民族(シンハラ、タミル、イスラムタミル)に対して「スリランカ医療和平事業」として、AMDAでは医療や保健教育などを行いました。また「スリランカ医療和平事業パートII」として2011年からこれまでで、4回の無料白内障手術を異なる民族、異なるエリアで実施しました。さらに次世代の平和を担う学生を対象とした和平事業として、スポーツや宗教の交流を通じて相互理解、和平教育を実現したいという思いから2011年8月に第1回目となるスポーツ交流・文化交流・宗教交流を実現し、長期にわたって内戦が続いたスリランカでの和平構築事業の第二段階として、大きな一歩を踏み出しました。



本年度は、昨年同様にスポーツ、文化、宗教の3つの交流を柱とし、WCRPスリランカ委員会の代表も参加して開催されました。参加したのは、アマラダプーラ県、北ムラティブ県、トリンコマリール県から仏教徒、ヒन्दウー教

徒、イスラム教徒、キリスト教徒の中学生、教師、職員合わせて120人。

開会式では、スリランカ言語・社会統合省、スリランカ教育スポーツ省アマラダプーラ県、世界宗教者平和会議スリランカ委員会、AMDA、参加した教師、生徒それぞれの代表が共にランプに火を灯し、仏教、ヒन्दウー教、イスラム教、キリスト教の代表が平和と融合を願い、祈りました。

サッカー(男子)とネットボール(女子)の試合では、3つの混合チームを作り試合を行いました。この混合チームでの試合は、人種、宗教の違いを超えた中学生たちの会話を促すとても良い機会になり、生徒だけでなく、審判である教師たちも混合チームの試合を楽しみ、打ち解けることができました。宗教・文化交流プログラムでは、中学生と教師がそれぞれの宗教施設を訪れ、お互いの信仰、習慣について学びました。また夕方からは見事なダンス、音楽、演劇などの文化的出し物をそれぞれが発表しました。

参加した学生と教師たちからは、「来年もこのプログラムに参加し、再会したい」「来年もぜひ開催してほしい!」と本プログラムに対して高い評価の声と感謝の声があがりました。次世代を担う学生たちが、お互いの理解を深め、感謝し、尊敬し、そして違いを認め合うことができたことは、まさに、平和構築への第一歩であると言えるでしょう。



第27回国際保健医療学会学術大会 和気国際文化交流会議 開催報告

AMDA 世界平和パートナーシップ構想の実現に向けて

【第27回国際保健医療学会学術大会】

11月3日、4日の2日間、第27回国際保健医療学会学術大会が岡山大学津島キャンパスを会場に開催され、AMDAグループ代表である菅波茂が大会長を務めました。

3日の午前9時に大会長の開会宣言でスタートした学術大会は9:30からはAMDA社会開発機構理事長鈴木俊介氏を座長としてミニシンポジウムが開催され、「共創の国」のODAとNGO-医療保健分野のODAにおける本邦NGOの今後の役割-と題して活発な議論が行われました。また午後からは市民公開講座の時間を設けました。大会長講演「世界平和パートナーシップ構想」では、これまでのAMDAの活動から人間関係、人権の定義、平和の定義などについて語られ、それを踏まえた今後の世界平和に向けた行政、企業、民間、NGOなどの世界的な連携の重要性などを話しました。続いて行われた岡山アワー公開シンポジウムでは、医療、宗教、行政、それぞれの立場のシンポジストが、「岡山の精神風土」を大テーマとして、それぞれの講演を行いました。

4日のシンポジウムIVではインド・韓国・タイ・台湾・トルコの5カ国からゲストを招き、日本のゲスト2名とともに、AMDA菅波茂

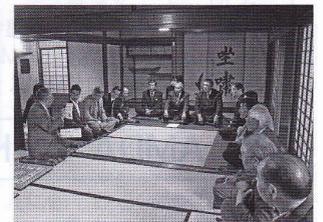


が座長となって、「来る大災害に対する海外医療チームの受入れ体制の整備」のテーマでシンポジウムを行いました。このシンポジウムでは「今後想定される災害などを乗り越えていくためにはアジア地域間の国を超えて協力し合うことが重要となる。より具体化したガイドラインの準備や相互扶助とパートナーシップの強化が望まれる。」と、シンポジスト、コメンテーターらと握手を交わして締めくくられました。

【和気国際文化交流会議】

学会終了翌日の11月5日、トルコ、タイ、台湾からのゲスト3名、和気町長・大森直徳氏、和気教育長・朝倉健作氏、和気閑谷高等学校長・加治信正氏を招いて、AMDA関係者を交えて和気町尺所、国指定重要文化財・旧大國家住宅で会議が開かれました。地元ボランティアによる琴の音色を聴きながらのお茶席ののち、平和と教育について語り合いました。「国際平和のためには教育の充実が重要である」という考えから本会議が実現しました。

国内外の医療だけでなく教育や文化の面でも、相互理解が重要であり、それぞれの良いところを取り入れ、協力することでこれから起こりうる大災害の備えともなることを再認識し、強固な世界平和パートナーシップの構築を誓いました。



書き損じハガキを
集めています!

皆様からいただいた書き損じはがきは、切手に交換して、通信費として使っています。未使用切手も集めています。ご協力をお願いします。

※お問い合わせは Tel:086-252-7700 Fax:086-252-7717

今年も皆様のご協力により、さまざまな活動を実施することができました。ありがとうございました。感謝とともにダイジェストをお届けいたします。2013年もよろしく願いいたします。